

日記文学から読者が見えなくなるとき

——『とはずがたり』論への序説——

森 田 兼 吉

われわれが日記文学と呼んでいる平安時代・鎌倉時代の作品群が、記録としての日記とはまったく性格の異なるものであることは今日では常識になってきたといつてよいだろう。日記文学作品が読者を予想し読者の存在と深く関わって成立していることも、今更論じるまでもあるまい。いま私は『とはずがたり』について論じようとしているのだが、その前段階として『土佐日記』を含めた女流日記文学作品の一つ一つについて、そこに予想されている読者がどのような人たちであるかを整理してみよう。

○『土佐日記』

紀貫之と親しい歌人・文人たち。年少の人たちのための和歌の指導書としての性格の説かれることもあるが、和歌の指導、それも年少の（実作の経験も乏しい）者たちを対象とした指導ならば、別の形のもの（が）ふさわしいはずで、ここに見られるような、諧謔や風刺や、女性仮託が（か）もし出すおかしみも、年少読者とは無縁のものである。

○『かげろふの日記』

日記文学から読者が見えなくなるとき —— 『とはずがたり』論への序説 ——

道綱母は作品の序の中で「天下の人の品高きやと問はむためしにもせよかし」とおぼゆるもと書いている。傍線部はこのように校訂して、「この上ない高い身分の人に嫁した女の生活はどんなものなのかと尋ねる人がいたら、その答えの一例」とか「この上もなく高い身分の人との結婚の真相はどんなものかと尋ねる人がいたら、その答えの一例」とか訳すのが普通なのだが、「……と結婚した女」という句を補って訳すという無理がある。今西祐一郎氏のように「この上なく貴い身分の人とはどのようなものか、尋ねようとする際の一例にも」と訳すか、室伏信助氏のように「天下の人の品高き、宿訪はむためし」と校訂して「撰籍の御曹子が女の宿を訪う例」と理解するかしなければならぬだろう（私は後者に傾いている）が、いづれにしても、上流貴族社会に関心をもち、憧れている女性を讀者として想定していたことは確かである。

○『和泉式部日記』

作品の巻末近く、帥宮の心細げなことはに端を発する二人の歌の贈答がある。

いかにおほさるゝにかあらん、心細きことどもをのたまはせて、

「猶世の中にあるはつまじきにや」とあれば、

呉竹の世々の古言おもほゆる昔語りはわれのみやせん

と聞こえたれば、

呉竹のうき節しげき世の中にあらじとぞ思ふしはしばかり

も

引用に用いた岩波文庫本は三条西家本を底本としているが、和泉式部の歌の第五句の「われ」(寛元本も同じ)は応永本系諸本と『和泉式部正集』の日記重出歌群との形「きみ」が原形であろうことは何度も論じたことがある。⁵⁾和泉式部は贈答歌を中心とした二人の恋を世々を経て語り伝えられてきた古い歌物語にも相当するところらえ、それを長寿を得た宮様こそが昔語りとして語り伝えてほしいと歌っているのである。しかし帥宮は、予感していたとおり二十七歳の若さで薨じた。『和泉式部日記』は帥宮がなすことのできなかつた二人の恋の昔語りを、宮に代わって和泉式部がしたという性格をもっている。『栄花物語』や『大鏡』に伝えられているようなスキヤンダラスな世語りに対して、帥宮のためにも真実を伝えたいという思いもあつたらう。その読者は和泉式部周辺の人たち、たとえば中宮彰子の女房とか、帥宮の使っていた硯を式部に乞うたり(続集八六詞書)、見合わすべきことがあると宮のしたうづ(襷)を乞うたり(同一〇四)したような帥宮に仕えていた人などが考えられる。

○『紫式部日記』

道長の依頼によって成った『敦成親王誕生記』というようなものが根底にあつたであろうが、現存のものは宮仕へ希望のある若い女性を特定。いわゆる消息的な部分もともと日記と一続きのものだ

が、その結びの部分の「御文にえ書きつづけはべらぬことを、よきもあしきも、世にあること、身の上のうれへにても、残らず聞こえさせおかまほしうはべるぞかし」以下の文などによつても、紫式部とごく親しい、「身の上のうれへ」までも話せるような存在であつたこともわかる。架空の読者を想定して、ある人に語っているかのような形で書かれたという説⁶⁾もあるが、①印刷されることのないこの時代、作品は作者から手渡し⁷⁾の形で読まれ始まること、②自己表白の文字はまだ創造されてから日が浅く、そのような技巧的な作品がこの時代に成立したとは考えにくいこと、現にそのような作品は中古・中世を通して類例がない、などの点からしても認めがたい。

○『更級日記』

夫俊通や子どもたちのことがほとんど書かれていず、資通への思いが長々と書かれていることから、子どもや姪といった身内の者を読者に想定して書かれたものでないことはわかる。孝標女が予想した最初の読者は彼女の書いた物語の読者たちであつたらう。程度の差こそあれ、物語と実人生とを混同・同一視する物語の読み方は、若いときの彼女だけのものではなく、ごく一般的であつたらう。そんな読者たちに、物語と現実との相違を語り、物語との正しい関わり方を知らせることも『更級日記』の執筆意図の中にはあつたであらう。

○『成尋阿闍梨母集』(『成尋阿闍梨母日記』と呼ぶにふさわしい作品)

かきつけでもありぬべきことなれど、もしおはしたらばさ思ひけるともみ給へかし。

とあるように入宋している成尋が帰国したらこれを読んで、母の心

中を知ってほしいという思いが強く、成尋を第一の読者に想定して書かれたものである。また、

よに侍らずなり侍なんに、なちらしそといひをけど、それもおもひしる人かならずしもはべらじ。もしあはれしり給はん人はあはれとおほせかし。

ともあつて、八十歳を過ぎた成尋母は、一旦書いて遺したものは自分の思いにはかわからず世に広まっていくものであることを知っており、そうした後の世の未知なる読者をも予想していたことがわかる。これは『土佐日記』『かげろふの日記』以下のすべての作品の作者についてもいえることである。

○『讃岐典侍日記』

作者長子は、下巻末に、追記のような形で、読者について興味深い考えを述べている。「わがおなじ心にしのびまゐらせん人と、これをもろともに見ばやと、思ひまはずに、この条件ではすべての人があてはまってしまう。「されど、われをあひ思はざらん人に見せたらば、世にわづらはしく漏れ聞えんも、よしなし」、また、お互いに好意をもちあつている人でも「方人などなからん人は、はえなき心地すれば」という三条件を挙げて、それに合う人を求めて、常陸殿という女房に声をかけ、自分の家で「日暮らしに語らひ暮らして」と書いて文を結んでいる。自分に好意をいだいていない人と世間に悪い評判が流れると危惧したり、好意をもちあつている人でも「方人」——味方がない人ではつまらない、といったりしているところには、作品を人に見せれば世間の評判になることを知っていて、好意的に読んでくれるような人たちならばそれを見せたい

という思いまでも読み取ることができるといえる。

○『たまきはる』

作者は聞き手（読者）たちについて、次のように述べている。

A……今さらよしなき古事さへ思出でられて、つゞきもなく言ふかひなき昔物語をつれづれなるまゝに言ひ出づれば、片端をだにその世を見ぬ人は、さすがに聞かまほしうするもありけり。

B うるさく人の聞かまほしくすれば、おぼえぬことどもの、四十年過ぎ西を書きつくれど、我身のほかはおぼえず。

作者は建春門院に八歳から二十歳まで、八条院に二十七歳から五十五歳まで仕えた。八条院時代には院の養女春華門院にも親しく仕えている。Aは作品の序的な部分中のものであつて、作者が語っている、そして聞きたいという人もあるという昔物語とは、建春門院時代を中心に八条院時代をも含めた宮仕への思い出である。Bは作者二十歳の春の安元御賀として有名な後白河法皇五十賀の記事中のもので、人々が聞きたがったのは平家の盛りの時代の華やかな女房たちの服飾についてであつた。作者の語りた（書きたい）という思いと人々の聞きたい（読みたい）という思いが合致して成ったのが『たまきはる』であつた。八条院に仕えていた若い女房たちが昔物語の聞き手であり、この作品の読者として想定されてもいたであろう。『たまきはる』は作者が養子の禅尼に書かせた第一部と、作者の没後弟定家が反故の中から選んで付け加えた第二部とから成っている。その第一部の末に、

本云

健保七年三月三日書了。西面にて昼つ方、風すこし吹に、

少納言殿に読ませまゐらせて、と。

とある。「たまきはる」を書き終えてまずこの少納言殿に読ませたと解するのが普通である。とすればこの最初の読者であり、作者がもつとも読ませなかった人（の一人）ということになる。しかし、この奥書の書き様と、養子の禪尼が書き終えたと同時に、作者が読み返しもしないうちに読者が出てくる唐突さなどから、わたくしは、この奥書は養子の禪尼の手になるもので、作者建春門院中納言の草稿を少納言殿に読ませ、作者の確認を受けながら禪尼が書いていたことを示しているものと理解している。

○『うたたね』

作者の予想している読者を特に限定しうる句文は見当らない。作者が宮仕え生活を送り、尼になるためみずから髪を切つて夜中にその御所を出奔した安嘉門院の女房たちでもあろうか。作品の末に付された中務の歌、

われよりは久しかるべき跡なれど偲ばぬ人はあはれとも見じ

の「偲ばぬ人」は彼女から去つていった恋人を念頭に置いたものとは解せるが、その人に読んでもらうためにこの作品を書いたとするのは無理だろう。「偲ばぬ人」は作者とは無縁の人とも取れ、自分の書いたものが死後まで遺り、自分を偲ぶはずもない人々にまで読まれるであろうとは意識していたであろうことが、この歌から推測される。

○『十六夜日記』

為家の遺領細川庄をめぐる長男為氏と阿仏との子為相との相統争いで、訴訟のため阿仏が鎌倉に下つたときの道中記と長文の序、そ

れと鎌倉滞在記を中心とする『十六夜日記』は、はっきりとした目的意識を持って書かれた作品である。阿仏の子どもたちの紹介や、彼女を氣遣つて鎌倉にまで消息を送つてきた人たちについて、たとえば「前の右兵衛督為教君の女、歌詠む人にて、勅撰にも度々入り給へりし、大宮の院の中納言と聞ゆる人」「又和徳門院の新中納言の君と聞ゆるは、京極の中納言定家の女……」と、為相の兄のむすめや定家のむすめなどまでも紹介して説明しており、我が子為相やその周辺の人々を読者に想定して書いたものではなかつた。関東の人々、訴訟を有利に展開するために、鎌倉幕府に関わる人々をも視野に入れて、自己の主張の正当性を強く訴えた書なのであろう。

○『弁内侍日記』 『中務内侍日記』

この二つの作品については一まとめにして書くことにする。前者は後深草天皇の女房、後者は伏見天皇に春宮時代から仕えていた女房の宮廷生活を舞台にした作品である。『弁内侍日記』には宮廷生活を離れた記事はいっさいなく、『中務内侍日記』には私的な旅行記を含むといったような相違はあるが、ともに年号や日付を多く記し、一見日次の日記を思わせるが、日次の日記などを基にしての回想記であり、宮廷生活を描きながら公的な記録ではない、という共通点をもっている。同じ宮廷生活の記といつても『紫式部日記』や『讀岐典侍日記』『たまきはる』などのようなテーマの一貫性はなく、これまでにない新しい形態の作品である。予想する読者の存在を示唆するような文もない。ただ『弁内侍日記』には、後嵯峨院の御所である鳥羽殿への朝覲の行幸の折、御所の景氣に感動した作者の、
世々を経て語り伝へんことはやけふ の紅葉なみらん

(欠字部分「のみ庭の」「見る庭の」ノドチラカ)

という歌が記されている。このすばらしい宮廷の華やかな日々と、そこで縦横にふるまい、本領を發揮している自分と妹少将内侍との生活や歌を後に残したいという思いはあつたであろう。『中務内侍日記』も、序に続く、

たゞかゝる世のそゞろことのみ心にしみて忘れがたき中にも、弘安三年、伏見殿の御儀法とて、院の御方は御留守なりしに……

といった書き起しや、そのすこし後の、

世に経れば何となく忘れぬふしなくも多く、袖もぬれぬべきことわりも知らるゝこそ、かはゆくおほゆれど、ことに弘安六年四月十九日……

などの文から、忘れたい思いを書き記して、後の形見としたいという思いはあつたであろう。作品の成立が、作者が女房として在任中か退任後かは確認できない。しかし、二人とも女房として交友は多く、作品を喜んで読んでくれる者は少なくなつたであろう。

二

ここでようやく本稿で論じたい『とはすがたり』にたどりついたのだが、この作品も読者を予想して書かれたものであることは確かである。『とはすがたり』という書名は、作品中の語によるものではなく、読者後深草院二条自身の命名であろう。問わず語り——問われず語る、ということ、語りかける読者の存在を意識したことばである。巻一のページをばらばらとくっただけでも、

日記文学から読者が見えなくなるとき

——『とはすがたり』論への序説

。胸騒がしくおほえながら、「常磐井の准后より」とぞ、つれなくいらへ侍し。(P四)

。……とは何事ぞと、我ながら覚侍き。(P九)

といった「侍り」の使い方が目につき、読者を意識した文体であることはわかる。周知のように二条の作品執筆への思いは九歳の頃にまでさかのぼる。

九の年や、西行が修行の記といふ絵を見るに、かたぐに深き山を描きて、前には河の流れを描きて、花の散りかゝるに、ながむるとて、

風吹ば花の白浪岩越えて渡りわづらふ山河の水

と詠みたるを描きたるを見しより、うらやましく、難行苦行はかなはずとも、我も世を捨てて、足にまかせて行つ、花のものと、霧の情けをも慕ひ、紅葉の秋の散る恨みをも述べて、かゝる修行の記を書き記して、亡からん後の形見にもせばやと思しを、(巻一 P五二)

かつて菅原孝標女が少女時代に「源氏物語」に憧れたように、中世の大納言雅忠女は九歳頃に西行の修行記の絵に憧れたのである。『とはすがたり』の巻末には、

……身のありさまを一人思ひゐたるも飽かずおほえ侍上、修行の心ざしも西行が修行の式、うら山しくおほえて杜思ひ立ちしかば、その思ひむなしくなさじばかりに、か様のいたづら事をつけ置き侍こそ。後の形見とまでは、おほえ侍ぬ。

(五 P二四九)

とあって、前の文章に呼応する。前の文章と、「西行が修行の式」

がうらやましくて思い立つた修行（それはすなわち旅でもある）なのだから、その思いを空しくなすまいと書いただけだといふこの文章からは、『とはすがたり』の巻四巻五の紀行部分についてだけが浮かび上がってくるのだが、傍線をほどこした部分の、一人思つてじつとしてゐるのでは飽きたりない身のありさまとは、巻三までの愛欲に苦しんだ前半生までをも含むはずで、これで作品全体が一つに束ねられてゐることになるのであろう。これらが読者に向かつての発語であることはいうまでもない。巻末の文章の「後の形見とまでは、おぼえ侍ぬ」の「侍ぬ」は写本どおりの形だが、これが「侍らぬ」と読むべきものであることは諸注釈の一致するところである。謙遜した表現で「亡からん後の形見にもせばや」といふ九歳の頃の思ひは、それから四十年もたった（『とはすがたり』には作者四十九歳の年の記事までがある）執筆時にも、なおあつたと読まれる。自分の亡くなつた後のも人々に読まれることを二条は期待して書いているのである。

しかし死後の読者は別として、二条はその周辺にどのような読者を予想していたのだろうか。読者層を限定しようゝな内的資料は何も存在しないのである。

『とはすがたり』が継承してゐる『かげろふの日記』『和泉式部日記』『更級日記』などの自己の半生を描いた身ものがたりの作品——もつとも『とはすがたり』には宮延生活の記といふ要素も含まれてゐる——は、読者の限定はゆるやかであつた。上流貴族の結婚生活や社交に関心のある者、和泉式部と帥宮の変愛と歌に興味をもつ者、孝標女の物語を愛読してゐて、その作者にも心を寄せて

ゐる者、といふことはわかる。『かげろふの日記』や『和泉式部日記』の場合は作者の身近な人で、日頃から心を許して話し合える存在でもあつたらう。ただ、時代が下つて『うたたね』になると、こうしたゆるやかな限定もできず、後の世の読者をも予想してゐる点で『とはすがたり』と類似してゐるのだが、それでも安嘉門院四条の場合も、身近に彼女が語りかけたいような、そして彼女のことばに耳を傾け、作品を熱心に読んでくれそうな人はいたであらう。だが、二条の場合、その周辺に自分の身のありさまや思いを語りかけたいと思ふ人がいたのだろうか。これを読んでくださいと、二条が書き上げた『とはすがたり』を手渡した人はだれだつたのだろうか。『作品からそうした読者の顔は見えてこないし、作者の伝記的事実——といつてもそれは『とはすがたり』の記述からそう出ることはないのだが——からも想像はしにくいのである。すでに出家した二条が二月の二十日余りの月と共に都を立つて関東へ向かつたのは正応二年（一二八九）、三十二歳の年であつたと推定されている。元永元年（一一九〇）二月十六日に亡くなつた西行の百回忌が過ぎたところで、西行に憧れた二条にふさわしい時の設定で、意識的に立ちの日として選択をしたものであらう。巻四巻五はこの年から二条四十九歳の徳治元年（一二三〇）七月十六日の後深草院の三回忌の法事まで、巻四と巻五の間に七、八年の空白はあるが、約十八年間のことが描かれてゐる。執筆時には宮仕へ生活ははるか昔のこととなつてゐた。かつての同僚の女房などを読者として考えることはできない。

二条と関わりをもつた男たちも雪の曙西園寺実兼を除いてはすべ

て世を去っていた。西園寺実兼には後深草院が危篤の折りに面会を求めて久しぶりに対面し、その後何らかの形で経済的な援助は受けていたかもしれないが、かつての恋人に見せるような内容の作品ではない（後深草院が生きていたら見せたかもしれない）。二条の産んだ子ども何人かは生存していたらう。院に隠れて産んだ実兼との間の女子はそのまま実兼が連れて行って育て、永福門院か昭訓門院が比定されているが、このような人には見せられるような内容ではない、見すべき手立てさえありえない。有明の月の第一子は院のはからいで人の手に渡し、第二子も四十日余り手もとで可愛がった後山崎の人に託した。翌々年の正月ころには会ってはいないのだが、巻五で大集経の残り二十巻を書写する費用として大切な母の形見の品を処分しようと決心するくだりには「有漏の宝、伝ゆべき子もなきに似たり」（P二二三三）ともあって、子はなきに等しい。いずれにしても我が子に語りかけた内容ではない。

巻四巻五の間には十八年もの歳月の経過があり、当然書かれていないことが多くあったはずである。長い旅に出ているとき、二条は多分京都にいたのだろうが、そこはどこで、どういう暮らしをしていたのか。恐らくは久我家のゆかりの家で、久我家の援助や、仕える召使などもいて仏道修行をしていたのだろう。一人旅のように見える長旅にも同行した召使があったと見るのが自然であろう。だが、召使階級の、作品にわざわざ書かれることもない、いわば陰の人物など思いを語る相手ではなかった。

となれば、二条は、不特定の彼女自身にも顔の見えない読者に向かって問わず語りをしていった——『とはすがたり』という作品を

日記文学から読者が見えなくなるとき

——『とはすがたり』論への序説

書いていた、と考えるより他はないだろう。現代の我々から見れば当り前のことに思えるかもしれないのだが、日記文学の歴史の中では、『うたたね』あたりからその萌芽は見えてきたのだが、大きな変化であった。

三

かくありし時過ぎて、世の中にいとものはかなく、とにもかくにもつかで、世に経る人ありけり。かたちとても人にも似ず、心魂もあるにもあらで、かうものの要にもあらであるも、ことわりと思ひつつ……

『かげろふの日記』のこの書き出しの「かくありし時過ぎて」とはどのような時が過ぎたといっているのだろうか。若かりし日で、夢見がちな少女時代をさすとか、幸福だった時も過ぎ去つてと見る説から、このようにむなしかった過去半生とする説まで、さまざまに読み方のあることは、たとえば上村悦子氏『蜻蛉日記解釈大成1』を検すれば一望することができる。最近流行らしい意識本になると、「愛と憎しみに揺れ動いた長い歲月も今は遠く過ぎ去り」と懇切丁寧であり、ときには最初の一文が「過去にまでさかのぼって兼家どとの愛憎の記録を綴つてみたところで、もう今さら、どうなるものでもない」とされることもある。「かくありし時」が過ぎ去った作者の日々であることは疑いようもなく、上村氏が同書で指摘しているように、それを執筆時現在の生活感情に直接つながる、はかなく悲しい人生と取るか、過去には今と違つて意に叶つた幸せな日々があったのにそれが失われてしまったと嘆く気持ちを重く取るかの、訳の相違ではあるのだが、訳し方によって受けるイメージはず

いぶん異なる。ただ道綱母をよく知っていた第一次の読者たちは、この句から各自が知っている彼女の半生に思いを馳せて読み進めるだけで、幸福とか不幸とか、一語で定義することはなかった。「かたちとても人にも似ず」のところでは、「お綺麗な方なのに、ご謙遜ね」など心の中で呟きながら読んでいたのであろう。「柏木の木高きわたりより、かく言はせむと思ふころありけり」とあるところでも、兵衛府の高官はいくらもいるし、撰閲家の子弟がよくたどるコースでもあるのに、若い時の兼家と同義語として読めるのが当時の読者であった。道綱母もそれを承知で書いているのである。

『和泉式部日記』の場合を見よう。

夢よりもはかなき世の中を歎きわびつ、明かし暮らすほどに、四月十余日にもなりぬれば、木の下くらがりもてゆく。築土の上の草青やかなるも、人はことに目もとめぬを、あはれとながむるほどに、近き透垣のもとに人のけはひすれば、たれならんと思ふほどに、故宮に候ひし小舎人童なりけり。

夢よりもはかなき世の中を嘆き侘びている人が和泉式部であることを読者は知っている。そして故宮というところに読み至れば、恋人の宮様を喪つて悲しんでいるのだな、と理解する。でも、この宮様ほどの宮様だろう、とここで読者は多分迷う。何しろ和泉式部は兄弟二人の宮と恋愛し、その二人ともを喪つたのだから。そこで次に読み進める。

あはれにもののおぼゆるほどに来たれば、「その事と候はでは、なれしきさまにやとつ、ましく候うちに、日ごろは山寺にまかり歩きてなん。いとたよりなくつれづれに思ひたまへらる

れば、御代りにも見たてまつらんとてなん、帥の宮に参りて候ふ」とかたる。

ここで帥宮が出てくれば、前の故宮が冷泉院第三皇子弾正尹為尊親王、帥宮がその同母の弟大宰帥敦道親王であることがわかる。小舎人童のような階層の者が一人で長い間山寺歩きをするはずのないことを当時の読者はよく知っていたのだから、小舎人童は帥宮の供をしていたのだということもわかり、この世の無常を嘆いている和泉式部同様宮も物思いに沈んでいるのだとも知られる。この冒頭の短い文章の中で、和泉式部と二人の宮、それに小舎人童も加えた人間関係がよくわかり、男女両主人公の心の中までを語ってしまう手際は見事だが、それも和泉式部の身近に読者がいたからこそなしているわざであった。

和泉式部と為尊親王との恋愛はなかったか、あつたとしてもそう熱烈なものではなかったらうとする説がある。もしなかったとしたら、この冒頭部分を読んだ最初の読者たちは、首をかしげていぶかしんだり、眉をひそめたりしただろう。——この故宮様は弾正宮様らしいけど、和泉さんとの間に何かがあつたなんて、そんな噂聞いたことないわ。何か変ね。——こうなつたら工夫を凝らした書き出しの効果も無くなり作品に描いた事実の信頼性もうすれてしまうのである。そんな虚構の入り込む余地があるのだろうか。周知の虚構の問題はしばらく後に触れるとして、まず注目しなければならぬのは、『とはすがたり』の場合初期の読者たちが作者のことをほとんど、あるいはまったくといってよいほど知らなかつたらうし、二条もまた、自分を知らない人物を読者に想定して書いていたらう

ということである。それ故に、二条は自分自身のことを読者によく知ってもらわなければならなかった。

日記文学の中で宮廷を舞台にした作品も含めて、『とはずがたり』ほど作者の氏素姓が克明に語られている作品はない。定家以来の歌道の継承者であることを誇り主張する『十六夜日記』に若干それに類することがみられるが、家系や氏素姓などに触れた作品はなく、『かげるふの日記』以下の身ものがたりの作品では自分の作品の名もだれの娘であるかも書かれてはいないのである。『とはずがたり』には作者の出自・家に触れている部分が多い。中には次のような極端な例もある。巻一末、二条十五歳。二条が後深草院の寵愛を受けていることを快くおもっていなかった院の正妃東二条院より、「二条殿が振る舞ひのやう、心得ぬ事のみ候時に」云々の抗議の文が届けられたときの、後深草院の返書中の文である。

二条が事、いまさらうけ給はるべきやうも候はず。故大納言典侍あり、この程、夜昼奉公し候へば、人よりすぐれて不憫におはえ候しかば、いか程もと思しに、あへなく失せ候し形見には、いかにも申置き候しに、領掌申さ。故大納言又、最期に申子細候き。……四歳の年、初参の折、「わが身、位浅く候。祖父久我太政大臣が子にて参らせ候はん」と申て、五緒の車、数袖、二重織物聴り候ぬ。そのほか又、大納言の典侍は北山の入道太政大臣の猶子として候しかば、次でこれも准后御猶子の儀にて……大納言、二条といふ名を付きて候しを、返しまあらせ候し事は、世隠れなく候。されば、呼ぶ人候はず、呼ばせ候はず。……久我は村上の前帝の御子、冷泉、円融院の御弟、第七皇子

日記文学から読者が見えなくなるとき——『とはずがたり』論への序説——

具平親王よりこの方、家久しからず。…… (P 六一—三)

新日本古典文学大系本で九〇〇字にも余る長文の後深草院の手紙は、二条は確かに見せられたものではあるが、はつきり覚えられないはずもなく、書き写すことなどできたわけもない。これは執筆時の二条の創作に近いものだろう。これと、巻五、父(故大納言)三十三回忌で墓前に詣でたときの、

……さて、この度の勅撰には、漏れ給けるこそ悲しけれ。我、世にあらましかば、なか申入れざらむ。続古今よりこの方、代々の作者なりき。又、我身の昔を思ふにも、竹園八代の古風、むなく絶えなむずるにやと悲しく……祖父久我の太相国は、「落ち葉が上の露の色づく」言葉を述べ、我は、「をのが越路も春の外かは」と言ひしより、代々の作者なり。外祖父兵部卿隆親は、鷲尾の臨幸に、「今日こそ花の色は添へつれ」と詠み給き。いづ方につけても、捨てらるべき身ならず。具平親王よりこの方、家久しくなるといへども、和歌の浦波絶えせず。

(P 三三五—六)

とあつたりするのを考え合わせれば、これは執筆意図や作品の主題と深く関わるものだとは思われる。また、早く松本寧至氏は、『雪の曙』『有明の月』の人物考証と共に『とはずがたり』の方法について論じた中で、これらが匿名になっているのに、後深草院が匿名になつていないことを指摘し、そのことからすれば、後深草院——二条の立場を作者が意識的にとつていることも読み取っておられる。こうした家系や後深草院との関係は二条のアイデンティティであり、顔の見えない、自分のことを知らない読者に対しては、これ

だけは押えておきたいという事柄でもあつたらう。私は『かげろふの日記』とルソーの『告白録』などを比較して、日記文学と西欧の自伝との類似性に注目しているのだが、西欧の古い自伝の著者たちは、

私は、一七二二年、ジュネーヴで、公民イザーク・ルソーと、同じく公民シユザヌ・ベルナルとのあいだに生まれた。

(ルソー)

さて、私は名をベンヴェヌート・チエツリーニと申し、マエストロ・ジョヴァンニ・ダンドウレア・デイ・クリストファノ・チエツリーニの息子である。母はマドンナ・エリザベッタ・デイ・ステファノ・グラナツチと呼び、兩人ともフィレンツェの出である (チエツリーニ)

父親はファツィオといい、法律家であつた。祖父はアントニオ、曾祖父はやはりファツィオ、そして高祖父はアルドロー。ファツィオ一世の息子としては、ジョヴァンニ、アルドロー二世、そして私の祖父にあたるアントニオがいた。アントニオには……(以下略) (カルターノ)

のような両親や家系について述べるのが普通であつた。著作は印刷され、著者の名も記されているが、公刊されたものだけに、読者のほとんどが著者を知らなかつたのである。身近な読者に手渡されることから読まれ始めた日本の日記文学との大きな相違である。『はずがたり』だけが異例なのである。

読者が見えないことと、虚構や醜化の方法との関係も考えなければならぬ。雪の曙や有明の月を匿名にしたり、有明の月の没した

年月日等に細工をしてことさらに誰だかわかりにくくしたりということは、予想する読者が身近にいても行わなければならなかつたではあろう。この二人とのかはごく親しい数名？を除けば身近な者にも秘密を守っていたらうし、最初に予想した読者を越えて作品が一人歩きすることはもちろん二条も知っていたらうからである。だが、後深草院との初枕のことなどはどうだろうか。二条はこれを全く思いもかけなかつたことだつたと記す。正月十五日の夕方、急に自邸から迎えの使者がやつてきた。不思議に思いながら御所を退出すると、家は例年よりも華やかで、屏風も畳も几帳も引き幕まで格別にしつらわれている。新年だからだと思つて寝ると、翌日は朝から、院の御食事とか、御供の殿上人の馬や公卿の牛はどこへつなごうかなどと大騒ぎをしている。何事かと問うと、今宵後深草院の方違えの御幸がここにある。あなたはその御陪膳の役として迎えたのだという答え。

「節分にもなし。何の御方違へぞ」と言へば、「あら、言ふかひなや」とて、みな人笑ふ。されど、いかでか知らむに、我つねにゐたる方にも、なべてならぬ屏風立て、小几帳立てなどしたり、「こゝさへ晴れにあふべきか。かくしつらはれたるは」など言へば、みな人笑ひて、とかくの事言ふ人なし。

夕方になりて、白き三單衣、濃き袴を着るべきとて、おこせたり、空薫きなどするさまもなべてならず、ことごとくしきさまなり。火ともして後、大納言の北方、あざやかなる小袖を持ちて来て、「これ着よ」と言ふ。又しばしありて、大納言おはして、御竿に御衣掛けなどして、「御幸まで寝入らで、宮仕へ。女房

は何事もこはくしからず、人のまゝになるがよき事なり」など言はるゝも、何の物教へとも心得やりたる方なし。

(P五一六)

それでも寝入ってしまったて、ふと目覚めるとそばに馴れ顔に寝ている人がいる。それが院であつた。——と二条は書く。

しかし、これほどのがあつて、なお気づかないことなどあるのだろうか。

作品中何度も書かれているように二条の母大納言典侍は後深草院にとつて初枕の人、いわば初恋の人であつた。先に引用した文章にも書かれているように、その人が二条の父雅忠の妻となつたために恋は続かず、しかも早逝したため、その形見として二条を四歳のときに御所に引き取り、養育したのである。無論女房の扱いではなかつた。好色な後深草院のことである。ねびまさつて母の面影を映した二条をしばしば女を見る目でみていたろう。後深草院の意図は誰にも見えていたはずである。退廢した後宮で育ち、九歳の頃西行の修行の絵を見て憧れ、自分も修行記を残したいと思つたほど早熟でもあつた。『源氏物語』を愛読して、光源氏と柴の上の初枕に至る経緯も知つていたであらう。そんな二条がその夜の意味に気がつかないはずはなかつた。このあたりは『源氏物語』の葵の巻を下敷にした仮構といわねばならない。

二条の昔からの友人などがこれを読んだら、そのおかしさにすぐ気づくであらう。「あなたは、後深草院の思ひ人になる子だつたのよ。あなたもそう振舞つていたのに」と言われかねない。

しかし、そんな心配はなかつた。読者は二条と後深草院との関係

日記文学から読者が見えなくなるとき——『とはすがたり』論への序説

の真実を知る人ではなかつたのである。

読者が見えなくなつたことで、二条は何を獲たのだろうか。

注

- 1 読者の推定のうち、『和泉式部日記』『更級日記』『たまきはる』『十六夜日記』『弁内侍日記』については森田『日記文学の成立と展開』（平八、笠間書院）所収の当該作品の項参照。なお本文の引用は、『かげろふの日記』『讀岐典侍日記』『弁内侍日記』『十六夜日記』は新編日本古典文学全集本、『たまきはる』『うたたね』『中務内侍日記』とはすがたり』は新日本古典文学大系本、『和泉式部日記』は岩波文庫本、『成尋阿闍梨母集』は角川書店刊の冷宗家本の複製本を私に校訂したものによつた。こくわずか、表記を読みやすく変えたところがある。
- 2 萩谷朴氏の諸論。『土佐日記全注釈』（昭四二 角川書店）が詳しい。
- 3 『蜻蛉日記』序跋考（文学 昭六二・一〇）
- 4 蜻蛉日記研究の近景——序文の読みをめぐつて——（『日本文学研究の現状』『古典』所載。平四 有精堂出版）
- 5 注1所掲書第一部第三章の二参照。
- 6 秋山慶氏 日本古典文学大系『柴式部日記』解説（昭三三 岩波書店）
- 7 谷口貞女さんが昭和五六年一月に提出した卒業論文の指摘による
- 8 石丸晶子氏 『蜻蛉日記』現代語訳 ある女の人生史（平九

- 朝日新聞社)
- 9 杉本苑子氏 『私家版 かげろふ日記』(平八 文化出版局)
- 10 『とはすがたりの研究』第八章 『とはすがたりの方法』(昭
四六 桜楓社)
- 11 『告白録』井上究一郎氏訳 岩波文庫(昭三三)
- 12 『チェッリーニ わが生涯』大空幸子氏訳(昭五八 新評論)
- 13 『わが人生の書』青木靖三・榎本恵美子氏訳
(昭五五 社会思想社)